

で「五月」、「十二月」を描きあげた。

B男の行動について観察者は次のように記録している。

「よし沿岸に書いて」と言ふ。
五月 黒鉛筆で「カニ」を書く。もう一匹、「カニの兄弟だ」教科書とちよつと見て、後ろの子供としゃべつて、魚、カニの葉、木、かめせせ、カニと名称を入れた。色鉛筆で色をぬる。石をかく。アツてかく。まわりを見ている。教科書を見て確認している。
十二月 黄色で大きく「まなし」赤を半分入れて、赤で「カニ」三匹、アツ。どの色を使ひうかと思つて。水中から水面に木をかく。「できた」の声、青と光をつけた。
とどまらず「まなし」と思う。自信がある。とけり。まづ「絵」をあげていた。

また、E子の行動について観察者は次のように記録している。

E子は全体として、鉛筆の運びが速く、カニ、石、魚等、形のあるものから描き始め、水を最後に染めている。水の色は、色彩豊かに「五月」と「十二月」の対比を出そうとしている。また、登場している「物」で「五月」と「十二月」の情景を対照的にスケッチしている。 — 評価を(+)とする —

以上のように、いずれも十分達成(+)の評価である。B男、E子は授業終了後に実施した「反省カード」による自己評価では、それぞれ次のように述べている。

B男：「まなし」は作者が作った言葉が多く入っていたのでむずかしかった。
絵を書く時間が短かった
いつもより授業がおもしろかった。

E子：今日の授業で絵を書いたところがよかった。

よく発表できてうれしかった。

③ 考察

・指導者、観察者ともにこの評価目標に対してマイナス・チェックはなく、くいちがいはなかった。むしろ、観察者の結果があまりにも揃いすぎて、評価基準が不適当ではなかったかという疑問が生じてきた。

そこで、B男、E子の自己評価法による「反省カード」を調べてみた。「いつもより授業がおもしろかった。」(B男)「絵を書いたところがよかった。」、「よく発表できてうれしかった。」(E子)という情意面におけるプラスの自己評価をしており、観察法による結果を裏づけるものとなった。

観察法と自己評価法を組み合わせることで、より客観性のある評価が可能になることがわかった。

・E子は、評価目標1ではおおむね達成(0)の評価であったが、評価目標2では十分達成(+)の評価を得ている。この点について観察者に次の記録がある。

自分の感じとったことを絵に表現しようとする態度はきわめて積極的で、色鉛筆の色不足を嘆いている状況である。しかし、読み取ったことを発表しようとする表現力に欠けているものの、関心の高さをとらえるには、児童によってそれぞれの場合でとらえられるものでないか。

この観察者はさらに次のように述べている。

児童には、読む、話す、書く、絵を描く、それぞれに得意、不得意があると考えられる。いずれかの場面で高い評価が得られ、子どもが関心を高めていけるように授業展開を構成する必要性が感じられる。